

第一章 異動

1

大理石が敷き詰められた宮殿の広間では、次から次と舞踏団やら歌劇団が登場してパフォーマン
スを繰り広げている。正面には鬼面人を驚かすがごとき形相で、専制君主が周囲を威圧するよう
に舞台を睨みつけている。君主のお気に召さないショーの責任者が相次いで刑場へと連行される。
叫び声、失禁する男、女。君主を取り巻く男たちの失笑。阿鼻叫喚。あつ、膝を折って最後の審
判を仰ぐあの男、憐れみを請う卑屈な表情のゲス野郎は、視聴率の前にひれ伏す自分にそっくりで
はないか。

「このタコ、何やってんだ。あほ、間抜け。なんで中継記者の名前を間違えるんだよ。ああ、や
つてらんねーよ」

ディレクターの怒声によって、小林昭介の白昼夢は破られた。

東京大手町にある関東テレビ。東西に細長い一〇階建てビルの三階に報道フロアがあった。ニュース番組用の報道スタジオはその西側奥に位置する。

午後一時から五分間の定時ニュースが今まさに始まったばかりだった。

担当のアナウンサーが中継リポートをする記者の名前を読み違えたらしい。スタジオに隣接し、放送をコントロールする副調整室^{サブスタジオ}では、ディレクターがモニター画面を睨みながら、顔を朱色に染めて怒鳴り散らしていた。

番組の時間管理をするベテランの女性タイムキーパーも、ストップウォッチを持った手を振り回しながら、金切り声を立てた。

「だめ、だめー。言い直してる余裕なんかないよー。先行け先行け、ゴーゴー」
ディレクターがタイムキーパーに振り向きざま叫んだ。

「何言ってるんだよ、訂正、訂正。今直しとかなきゃ訂正する場所がねーんだよ」
「ああ、番組終わりまで残り一分。なんとかしてよ、もうー。私知らないよ」

報道局社会情報部長の小林は、怒号と罵声^{ののしり}が飛び交う副調整室を後にした。

定時ニュースの責任者として立ち会ったものの、小林は夕方五時から始まる一時間のニュース番組「イブニングニュース」のことで頭が一杯だった。視聴率が長く低迷し、プロデューサーとしての力量を問われ始めていたのだ。五分間の定時ニュースなど、極端に言えばどうでもよかった。

それよりも、先ほどの白昼夢の場面が蘇よみがえってきて仕方なかった。あの専制君主の顔は、社長のそれと瓜二つではなかったか。

二〇〇三年二月一三日、木曜日だった。

小林は遅い昼食を取るために九階の社員食堂に向かった。一〇〇人収容できる食堂にいたのは四五人だった。

小林は窓側の席に陣取り、林立するビル群のなかでもひとときわ目立つ丸ビルを眺めながら、「イブニングニュース」の今日のメニューに思いを巡らせていた。視聴率不振を打開しなくては番組の存亡に関わる。プロデューサーとしての責任は重大だった。

今日あたり、視聴率が跳ね上がるような、あつと驚く構成はできないものか。そんなことを考えながらカレーライスの最後の一口をスプーンでかき込んだ途端とたん、上着胸ポケットの携帯電話が震えた。電子音が嫌いでバイブレーションモードにしてあるのだ。

「はい、もしも小林ですが」

「ああ、あなた私ですけど」

妻の悦子からだだった。勤務中に妻から電話があることなどめつたにない。いやな予感がした。

「あのね、さっき電報が二通来たのよ。どちらも電王の人からで、一通は社長。もう一通は何とか部長となつてたわ。なにことかと思つて開けてみちゃったんだけど、両方とも同じ文面で『報道

局次長昇格おめでとうございます』となつてたわ。お知らせしとなくちゃと思つて「わかつた。ありがと」

小林は携帯電話をポケットに戻しながら電王の情報収集の早さに驚いていた。

三月定期異動の内示は明日一四日、金曜日に予定されている。それがたつた一日とはいえ、事前に、しかも社外に情報が漏れていたので。

それも自分ごとき部長クラスの詳細な人事までが流出しているとは。部長職は全社員二二〇〇人のうち一〇〇人は超える。

大手広告代理店、電王のすこさ、電波王国と呼ばれるほどの影響力の大きさは、これまで営業の人間などから聞くことはあつたが、実際に自分がその洗礼を受けることになるとは思つてもみなかつた。いったいどんな筋から情報を得たのだろう。

電王は取扱高およそ一兆五〇〇〇億円。テレビ、新聞、雑誌を含めた日本全体の広告費が年間約六兆円だから、一社でその四分の一を占める。もちろん断トツ最大手の広告代理店だ。

新聞広告やテレビのCMを新聞社や民放各社に代わつて集める。別の言い方をすると、広告スペースやCMの枠を売る。新聞社やテレビ局にすれば、その分営業部門の負担は軽くなるわけだが、あまり頼りすぎると自前の足腰が弱くなつてしまふ危険を孕んでいる。

そうは言つても、電王が官公庁、大手民間企業に張り巡らしたネットワークの威力は絶大で、テレビ番組のスポンサーを入れ替えるのは担当者の意のまま。番組の生殺与奪の権を握っているとさ

え言えた。

テレビ報道一筋でやってきた小林にとって、営業や編成など十分に把握できていない分野は多かった。そうした世界には電王をはじめ得体の知れない魑魅魍魎ちみもつりょうが蠢蠢いているに違いない。

今年で五四歳になった小林の同期入社は二〇人。今やみな編成や営業に散っている。

小林は慶應大学の経済学部を卒業し、テレビ報道に夢を託して二九年間。途中で二年間だけ経済情報部デスクをやった以外は、社会情報部に在籍していた。記者時代は警視庁、国会記者クラブが長かった。

入社時には同窓の人間が三人報道局に配属され、読日新聞系の先輩から「三バカトリオ」などとからかわれたこともある。一〇年前に三人揃ってデスクに昇格したが、いつの間にか一人は編成もう一人は映画部に異動した。小林だけが報道のエースとして残った。

関東テレビは全国紙である読日新聞系列のキー局で、人と資本を読日が支配している。経営トップはもちろん、主要ポストはすべて読日OBと出向者が占めていた。経済情報部には春・秋の定期異動で二、三人必ず新聞社から出向してきた。

新聞社からの天下り組と、関東テレビですつと育った生え抜き組はえぬきが何かにつけ対立する。生え抜きの小林が局次長ともなれば、天下り組からの風当たりも強くなるだろう。

小林は食べ終わった食器を急いで片付け、思い立って電王のテレビ部長、立川卓に携帯で電話をかけてみた。

立川は関東テレビの営業部門に頻繁に顔を出し、三回に一回は報道にも立ち寄り、誰彼となく気さくに声をかける。見た目は柔道選手のように大柄でこついが、マメなタイプで小林も顔見知りだった。小林とは同年輩だ。

運良く立川は在席していた。

「あ、関東テレビの小林、社会情報部の小林ですが、立川さんですね。さすがに情報早いですね。電報には驚きました。電王恐るべしですね。無駄話はともかく、祝電は早とちりになりませんか」
電話の向こうで軽い笑い声が聞こえた。

「ははは。そんなことにはなりませんよ。蛇の道は蛇というところですか、ご安心ください。それより本当におめでとうございます。局長になっても夕方ニュースのプロデューサー兼務は変わらないようですから、番組作りの考え方をこの際改めてじっくりと伺わなくてはと思っていたんですよ」

「そのことも含めて、立川さんにいろいろお聞きしたいことがあるんです。今晚空いてませんか。番組が六時に終わりますから七時以降だと助かるんですが」

電話を持ち直す気配がする。手帳で今日のスケジュールを確認しているのだろうか。やや間を置いて立川が答えた。

「七時過ぎなら都合をつけられますよ。どうですか、七時半に帝国ホテルのロビーでお目にかかるというのは」

「わかりました。無理を申し上げて恐縮です」

2

食堂から戻った小林が三階の報道フロア東側奥にある応接室に入ると「イブニングニュース」の視聴率対策会議がすでに始まっていた。

視聴率はテレビ番組を見ている視聴者の割合を百分率で示すものだ。だが、すべてのテレビ受信機に計測機を設置するわけにはいかなかったため、全国二七地区で計六二五〇の調査世帯を選び、機械が置いてあるとされていた。

関東・関西は各六〇〇世帯、名古屋は二五〇世帯、他の二四地区は二〇〇世帯ずつで、一分ごとにどのチャンネルを見ていたかが記録される。データは電話回線で調査会社に送られる仕組みだ。

二〇〇〇年に米国系の調査会社が撤退して以降は、電王系列である映像リサーチ社の独占状態となっていた。

テレビ各社は、視聴率のうち朝六時から夜一二時までの一八時間の平均を「全日」、夜七時から一〇時までの最もテレビ稼働率（HUT）チャンネルに関係なくテレビをつけている世帯の割合）が高い三時間を「ゴールデン」、これに夜一二時までの一時間を加えた四時間を「プライム」と称して、より高い数字を取ろうと鎬しのぎを削っていた。

全日とゴールデン、プライムの三つを制することを、野球の打撃成績になぞらえて「三冠王」と

称する習慣があった。

もちろん、自局の番組の良し悪しだけでは視聴率は推し量れない。同じ時間帯で放送している他局（裏）の番組の影響を受けるからだ。視聴率を上げるためには、裏番組の分析も欠かせなかった。そこで小林は社会情報部の筆頭デスク（次長）である中山晋一に命じて、ライバル局サンムーンテレビの夕方ニュース番組「ニュースの泉」との徹底比較をさせていたのだ。

中山は中堅のディレクター二人と、新人研修を終えて去年秋に配属されたばかりの一年生ディレクター一人、合わせて四人でチームを作った。最近一週間にわたってライバル番組を録画し、一つごとに「イブニングニュース」の視聴率の動きと突き合わせて、影響を分析したのである。

狭い室内はタバコの煙が充満してもうもうとしていた。

小林の姿を見て、中山と新人のディレクターは慌ててタバコを灰皿でもみ消した。

中山が小林に話しかけた。

「部長、すみません。時間になったので始めてました」

「いや、かまわず続けてくれ」

「はい。今ですね『イブニングニュース』の視聴率が最も落ち込んだ時間帯はいつか、そのとき裏の『ニュースの泉』で何をやっていたかを分析していたんですよ」

「それで？」

「ええ、結局ですね『イブニング』がCMに入った途端に、ごそつと視聴率を持っていかれてい

るんですね。逆に、敵がCMに入っても全然取り戻せていない。一週間ほとんどのパターンの繰り返しでした」

「なぜなんだ」

小林の語気が鋭くなった。

「お配りした資料でもおわかりのとおり、こちらがCMを流している間、敵は編集ビデオ物の特集を放送していました。曜日によって差はなく、特集が流れる時間帯は一定しています。ずれても一〇秒程度ですね」

中山はここで身を乗り出し、小林の手元にある資料を指差した。

「特集の尺（時間）はいつも一〇分間で、前半と後半に分かれています。この間にCMが入るんですが、前半のビデオの最後に視聴者が逃げないようにキヤッチコピーを入れてるんです。このせいでしょね。敵の視聴率はCMでも全然落ちてないんですよ」

「あざといような気もするな」

「特集だけじゃないんです。CM前に必ず、次のコーナーの見どころをテロップで出したり、短いビデオで見せたりしてます。芸が細かいんですね」

「うーん。考えてみれば、その程度のこととは番組制作者として当然やらなくちゃいけないことなんだろつな。視聴率三冠王奪還と言ってる以上。それと、敵は正月明けから、スタート時刻も変えたんじゃないかな？」

「そうなんですよ。五時ちょうどだったのを、五分前にしてますね。これも視聴率アップにつながっているようです。我々がCMやらキャスターの挨拶やらでもたもたしている隙に、もうニュースを流してるんですからね。かないませんよ。敵は全社をあげて『イブニングニュース』を潰しにかかるとしお思えません」

「たしかにな。スタート時刻を変えらるとなると、番組だけの力じゃどうしようもない。編成が了解してくれないことにはな。サンムーンは何としても視聴率三冠王を死守したいんだらう。負けちゃいられんぞ」

「えーと、部長、すみません」

ここで新人ディレクターの岡幸一が、マイルドセブンの箱を**もてあそ**びながら口を**はさ**んだ。

「私は去年、新人研修中に営業にも行きましたから、視聴率が営業収入に直結する大事なものであることはわかってるつもりです。しかし、たった六〇〇世帯の調査で、番組の好い悪いが判断できるのでしょうか。ずっと疑問に思っているのですが」

岡は新人らしさをまだ残す**きちめん**な物言い、小林のほうへ遠慮がちに顔を向けた。

新人ディレクターにしてみれば、部長などという人種は海千山千のすれっからしに映るのだからと想像しつつ、自分を試しているのかもしれないと小林は思った。

「君の言うことはよくわかる。ただ、判断できるかどうかじゃなくて、我々には視聴率しか物差しがないということだ。それと、長年この世界に身を置くとなわかってくると思うが、好いテーマ、